

エンドール城、大闘技場^{コロシアム}

ついに、ついに！

モニカ姫の思いがこもった^{グラン・ブルー}「宝玉」を胸に抱き、アリーナが、その戦闘台^{リング}に立つ時が来た！

眼前には、格闘界にその名を知られた＜拳聖＞ミスター・ハン！

「ファイト^{ファイト}開始！」

かけ声と同時に、アリーナの二段蹴りがハンの顔面を捉えた！

ドカァッ！

「ぐあっ！」

吹き飛び、倒れた＜拳聖＞を見下ろし、アリーナは言い放つのであった。

「今のは、ほんの挨拶がわり　さあ、続きをやりましょ、ミスター・ハン」

★

この物語は、後に「不屈の王女殿下^{ハイネス}」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第7話　「王女^{プリンセス}、躍^{おど}る」

あさづけ兄貴

「どうしたの？ まさか、これで終わり、ってことはないでしょうね」

ハンを見下ろしたまま、アリーナが、さらに続ける。

少し意地悪そうな目をした、自信に満ちた表情。

「驚いた 」

呟いたのは、観客席のブーメラン使い、ラゴスである。

「速い。いや、速いなんてもんじゃない しかもそれだけじゃない、実に正確だ」

「技のスピードとコントロールもそうだけど、それ以上に、あの度胸ね」

ビビアン^{ビビアン}の苦笑は、フードの中に隠れたままだ。

「まったく、あのミスター・ハンに奇襲を掛けようなんて、どうかしてるわよ。

正気の沙汰じゃないか、それとも、よっぽど自分に自信があるのか 」

「確かに、お姫様のおままごとではなさそうだな」

冷静な口調のサイモン。

「俺の読みは当たった、ってわけだが 当たって良かったのか悪かったのか

装備はこっち有利とはいえ、正直、好んで戦いたい相手じゃねえな」

「ぐふ、ぐふふふ 」

ベロリンマンは、相変わらず、不気味な笑い声を上げている。

「面白いんだな。あいつ、すごく強いんだな。戦いたいんだな。ぐふふふ 」

★

リング^{リング}戦闘台上。

ハン^{ハン}は、大の字に伸びたまま、動かない。

「お、おい 」

「脳震盪^{しんどう}でも、起こしたのか？」

「まさか、本当に終わりってことは 」

観客席が、ざわめき始める。

「ブライ殿 ？」

エンドール王の問いに、ブライは重々しい声で答えた。

「いや、仮にも名だたる『拳聖』、これしきで終わりはしますまい。第一」

やや勿体ぶった口調で、ブライが続ける。

「あの^{クラッベ}<蟹>、姫様は本気で撃ってはおりませぬ」

「^{クラッベ}<蟹>？」

聞き慣れぬ言葉に、モニカがやや戸惑った口調で聞き返した。

「左様。^{クラッベ}<蟹>です」

ブライが、両手の人差し指と中指で^{はさみ}鉗を作り、ややおどけた仕草で、その2本の指を開いたり閉じたりしてみせた。

それを見て、モニカも、それが彼女たちが「クラブ」と呼んでいる動物、すなわち「蟹」という意味の言葉であることを、即座に理解した。

「そういえば、説明しておりませなんだな。これは誠に失礼」

こほん、と咳払いして、ブライは説明を続けた。

「姫様の技の中には、いくつか、それ固有の名前がついたものがありましてな。あの二段蹴りもそのひとつで、名は^{クラッベ}<蟹> 正確にはその^{ヴァリエーション}変形のひとつですじゃ」

そう言って、右手で手刀を作り、自分の目の前に振り下ろす。

「本来、^{クラッベ}<蟹>という技は、一発目の前転蹴りがこう来た後、二発目が」

今度は、左手の手刀が外側から横に、シュッと空を切る。

「こう、横から相手の頭に当たるわけすな」

真剣な顔で、モニカは聞いている。

「ちょうど両脚で相手の頭を挟むように蹴るわけで、そこが蟹に似ておるということで^{クラッベ}<蟹>という名が付いておるのですが それだと、2発目が頭に当たるまでに少し時間がかかって、相手にガードされやすくなってしまうのですな。

それで姫様は、よくこれを少々アレンジして、2発目を」

ブライが再び、右の手刀を振り下ろし、そして今度は、次に左の拳を、勢いよく前に突き出した。

「こう、前から直接顔面を狙う蹴りに変えて出されるのですじゃ。ちょうど、先程のように」

＊

再び、戦闘^{リング}台上。
ハンは、まだ動かない。

いや

かすかに。
近くでやっと見えるほど、かすかに、ハン^の体^が震^えて^いる[。]。

「 ふいふい 」

「 ！ 」

一瞬、アリーナの表情が険しくなる。

笑い声が聞こえたのだ。
ハンが、笑っていたのである。

「 ふいふい はははは 」

笑い声が、大きくなる。

「 はーっはっはっは！ 」

ついには大声で笑うと、ハンが動いた！

横になったまま、その場で体を海老に曲げると、それを一気に伸ばす！
ハン^の鍛^え抜^かれた強^靱な背^筋力^と脚^力が、その体^を空^中へ^と跳^ね上^げる[！]
体^を空^中で起^こす[！]

スタッ！

何事も無かったかのように、先程まで横たわっていたのが嘘のように

ハン^は、再^び戦^闘台^に立^った[。]。

先ほどの蹴りのダメージは、全く感じられない。

「おお」
観客席から、どよめきが漏れる。

「あの蹴りが、効いていないのか？」
ひとりごちる王に、プライが返す。
「先ほど申したでしょう。姫様は『挨拶がわり』と言うておられた。本気で撃っては
おりませぬ」

「いい蹴りだ」
自らの額を蹴りを受けた部分を撫でながら、ハンは言った。
「だが、蹴った場所が悪かったな。倒すつもりなら、額でなく」
自分の鼻を指差す。
「鼻面を蹴るべきだった」

澄まし顔で、アリーナは答えた。
「言ったでしょ。あれは挨拶がわり。挨拶で倒れてもらっちゃ困るのよ」

ハンの目が険しくなる。
「わざと額を狙った、というわけか」
「昔に戻った貴方と戦えないまま勝つのなんて、いやだから」
「なるほど」
一瞬の苦笑の後、再び険しい目。
「だが、姫君^{プリンセス} あなたは大きな勘違いをしている」
言い放つ。
「私はまだ、何も見せてはいない。そして、それを見ても、貴方はまだ、今の言葉を
口にすることができるかな」

そして、ゆっくりと

右拳を、胸の高さで前へ。
左拳を丹田へ添える。
右足をずっと前にだし、半身のまま、腰をわずかに沈める。

試合開始前と同じ、力みのない、自然体の構え。
それでいて、一分の隙もない。

構えを取り終わると同時に、厳かに言う。

「この＜拳聖＞の力を」

そして沸き上がる闘気！

「凄い　さっき以上だ」

クリフトが、思わず息を飲む。

「確かに、凄まじい闘気じゃ」

対してブライは、余裕の口調だ。

「じゃが、あれを見て怯む姫様ではあるまい」

「へえ」

アリーナは、涼しい顔で答えると、ハンと同様に、ゆっくりと、両手を顔の前に上げた。

右足を前に出し、少し体重を前にかける。

これもまた、試合開始前と同じ、アリーナ独特の構えだ。

「見せてもらおうじゃない」

半開きの両手の影に隠れたその眼差しは、１７歳の少女とは思えないほど鋭い。

そしてまた、ハンに匹敵する、凄まじい闘気！

「ブライ様のおっしゃる通りですね」

クリフトが安堵する。

「じゃな」

＊

双方、構えを取ったまま、動かない。

ように見えた。

しかし

「ん？」

観客席で、最初に気がついたのは、ラゴスであった。

わずかに、ごくわずかに。

距離にして、恐らく、数センチほどであろう。

ハンが、右足を摺り足で、ずずっ、と前に進める。

次に、左足。

やや間があり、また右足。

左足。

ずずっ。

ずずっ。

「間合いを 詰めている？」

そう、ハンは、一度に遠目に分かるか分からないかの距離で、しかし少しずつ少しずつ、確実に、アリーナとの間合いを詰めていたのである。

それを認識しているのか、それともいないのか。

アリーナは、ハンをじっと見据え、動かない。

「ぬっ！」

ブライも、気がついたようだ。

「どうされた、ブライ殿？」

「ハンが、少しずつ間合いを詰めておるようです」

王の問いに答える。

「そういえば、最初よりずいぶん、アリーナ姫様との距離が近いような」

モニカが相槌を挟んだ。

「元来、武器を使わぬ格闘家の攻撃の間合いというのは、得てして短いもの。彼奴め、動かぬように見せかけて、自分の間合いまで近寄ろうとしておるようです」

ブライの説明が続く。

「ハンの方が、姫様より体が大きい分、手足も長い つまり、彼奴にだけ届いて、姫様の届かぬ間合いがあるわけですね。言うなれば、あちらが一方的に攻撃できる間合いが」

「あちらが 一方的に 」

「ブライ殿！ もし、ミスター・ハンが、その間合いに入れば！」

「お考えの通りですじゃ。彼奴は、そこに入った瞬間に攻撃して来るに違いありませぬ」
王とモニカに、厳しい顔で告げる。

「あの調子だと、あと5～6歩、というところかの 」

「アリーナ姫様 」

心配げに、胸の前で両掌を組むモニカ。

クリフトも、何も言わず、戦闘^{リョウグ}台の上の二人を見つめている。

＊

じりっ。

じりっ。

ゆっくりと、ハンは歩を進めている。

アリーナは、それでも、まだ動かない。

そして、あと3歩ほどで、ハンの間合いとなろう、その距離で
そう、間合いに入る寸前のさらに寸前ほどのタイミングで

「ハッ！」

気合一閃！

ハンが、右足を大きく踏み出した！

と同時に、予備動作無し^{ノーマーション}で、右拳を前に突き出す！

「！」

意表を突かれる観客達！

無駄な動きの全く無い、理論上最速の突きが、アリーナの顔面に襲いかかる！

「ヒッ！」

思わず声を上げるモニカ！

アリーナは、この恐るべき拳撃を、わずかな見切りで、右に頭を振り、かわす！
だが、それこそが、ハンの思惑だった

ハンは、そのアリーナの右　　ハン自身から見て左の足で、上段蹴^{ハイキック}りを放っていたのだ！
まさに、かわしたアリーナの頭が位置するであろう、その場所を！

踏み込んでの突きから、逆の上段蹴^{ハイキック}り。
必殺の二段攻撃！

しかし

「なにっ！」
ハンが小さく叫ぶ。

アリーナは、頭を振って最初の突きをかわした後、そのまま頭を下げ、次の蹴りまでも
かわし切っていたのだ！

その姿勢のままバックステップし、再び間合いを外す。
そして、頭を起こし
にやり、と、笑った。

「おお！」
王が感嘆の声をあげる！

「かわすか　あれを」
何か信じられない物を見たような口調で、ハンが呟く。

間合いの外、相手が心構えをする前の攻撃。

最速の拳をかわしても、斧のような上段蹴^{ハイキック}りが待っている。

この連続攻撃を決め技に、ハンは今までに、幾人もの強敵を破ってきた。

それほどの技を、アリーナは、簡単にかわし切ってみせたのだ。

ハンが驚愕するのも、無理もない。

そして、彼女の口から次に出た言葉も、また、ハンを驚愕させるものだったのだ！

「遅ーい！」

ピクッ！

「遅い　？」

「だって、全部見えるもん。あんなのじゃダメよ」

「言うなあ、姫様」

クリフトも、冷や汗ものである。

「ならば　」

ハンは、わずかに後ずさると

「これならどうだ！」

猛然とアリーナに襲いかかった！

今度は一度拳を引いてから、アリーナの左の頬めがけ、外側から大きく弧を描くように
右のフック！

アリーナはバックステップでかわす！

ハンの拳は、アリーナの眼前で空を切り、彼女から見て左から右に流れて行った。

が

ハンはそこから、肘を曲げ、さらに踏み込んだ！

顔面に、肘を叩き込もうというのだ！

「くっ　」

さすがのアリーナも、歯を食いしばりながら、左後ろに体をずらし、肘をやり過ごす！

ハンの攻撃はまだ止まない！

自分の左に流れた体を元に戻すべく、右に体をひねり返しながら、左足で、アリーナの右脛に下段蹴り！

バシッ！

革を裂くような音が、戦闘台に響く！

「当たった！？」

いや、アリーナは咄嗟に右足を浮かせ、蹴りの衝撃を殺していた！

だが、その一瞬

アリーナが片足で立った、フットワークが死んだその一瞬こそ、ハンの狙いだった！
顔面に、渾身の左正拳！

通常ならばかわせぬはずのこの拳。

しかし、アリーナは何と、左足一本でバックジャンプ、天を仰ぐように後ろに倒れ込みながら、かわしたのだ！

そのまま後転、再び立ち上がる！

「ふう」

呼吸を整え、再び不敵な笑み。

「今のは、ちょこっと危なかったわね　でも、やっぱり、見え・た・わ」

「信じられない」

観客席。

フードの中の表情は分からぬまでも、明らかに驚いた口調のビビアン。

「どうして、今のがかわせるの？」

「バカな！」

思わず、ハンが声を荒らげる！

「何故かわせる！」

「だから言ったでしょ、見え・た・って。遅いから見えるし、見えればかわせる。簡単よ」

とんでもないことを、さらっと言ってのける。
そしてさらに

「最低でも 」
そう言うと、今度は自ら、ごく無造作に、ハンの間合いに踏み込んだ！
と同時に、電光のごとき右正拳が、ハンの顔面に飛ぶ！

「速 」
すんでのところで、頭を右に振ってかわすハン。
しかし、そこには既に、アリーナの左足が待っていた！

こつん。
ほんの軽く、触る程度に、アリーナの足がハンの右側頭部に当たる。

すっ、と足を下ろし、
「このぐらいのスピードじゃなきゃね。へへ」
と、笑うアリーナ。

ハンの顔面から、血の気が引いていた。

右正拳から左上段蹴り。
ハンのもっとも得意とする 彼自身が先ほどアリーナに放った連続技だ。

アリーナは、完全にこれをかわし切った。
しかし、ハン

今の蹴りは いや、「蹴り」と呼べるものではない。足がほぼ完全に止まっており、
頭に軽く当たる程度の物であったからだ。

しかし、アリーナがもし全力で蹴っていれば、ハンは今ごろ、地に伏し、立ち上がるこ
とが出来ぬまま、敗者の名に甘んじることになっていたであろう。

彼女は、明らかに手加減したのである。
その目的は、当然

「どう？ 昔の貴方に戻る気になった？」
アリーナが、軽い笑みを浮かべながら、問いかける。

彼女は、5年前の、まだ荒ぶる格闘家であったハンと戦いたかったのだ。

しかし、ハンは無言であった。
再び、同じ構えを取り、対峙する。

「そう 」
溜め息をひとつ。
「じゃあ、もう一押し！」
そう言って、アリーナは再び、ハンの間合いに入った！

外側から回り込むように、顔面へのフック！

ピシッ！
ハンがバックステップしてかわすが、かわし切れず、頬をかすめる！
皮膚が切れ、血しぶきが舞う！

アリーナは、そこからさらに、肘を曲げ、踏み込む！
ハンの鼻面を狙う肘を、余裕が無いながらも、彼はかわし切った！

先ほどの、ハンの二度目の連続攻撃と同じコンビネーション。
しかし、アリーナは、そこから、曲げた肘を伸ばしながら、腕を勢いよく外側に回した！

ガッ！
強烈な バックフロー 裏拳 が、ハンの右側頭部を捉える！
「ぐうっ！」

さらに体を右に回しながら、左の ローキック 下段蹴り！
バシィッ！
先ほどのハンが放ったものとは比べ物にならないほど大きな音を立てて、ハンの右脛に、
アリーナの左足が食い込む！
ハンの顔が、苦痛に歪んだ！

そのまま下ろした左足に体重を乗せ、アリーナの左拳が放たれた！
拳が、ハンの顔面を捉える！

かに見えた。

しかし
アリーナは、その正拳を、ハンの顔面に当たる寸前で止めていた。

そのまま、拳を引く。

「おんなじパターンでも、一発増えただけで、けっこうイヤでしょ」
そう言って、また微笑み。

ハンは、目を伏せる。
そしてそのまま、動かない。

ハンの体を、心を、右脛の痛みと恐怖とが揺さぶる。
青ざめた顔。

積み上げた自信が、揺らいで行く。

先ほどと同じく、ハンが使った技を、返された。
ただ一度だけ見た技を、しかも、腕を戻しながらの^{バックフロー}裏拳という、本来はない新しい攻撃を加えて、だ。
それでいて、攻撃自体はハンの物より速い。
そして、この攻防でもまた、最後の正拳を寸止めされていなければ、ハンは負けていた。

あらゆる面において、アリーナの力は、ハンを上回っていたのだ。

＊

「これでどう？」

先ほどと同じように、アリーナがハンに問いかける。

「もう、貴方にも分かってるはずよ。＜拳聖＞のままでは私に勝てないって」

ハンは、答えない。

「いい加減、意地を張らないで、本当の力を出して。私の願いをかなえて」
必死に懇願するアリーナだが

「 いや、まだだ」

目を伏せたまま、ハンは静かに言った。

「まだ、＜拳聖＞は 私の5年間は、負けてはいない 」
そう言って、視線を上げる。

ハンの瞳は、まだ死んではいなかった。
まだ、勝利を諦めてはいなかった。

アリーナを睨み、再び構えをとる。

（えっ？）
凄まじい気迫の中に、アリーナは、今までのハンのそれとは違うものを感じ取っていた。
（何か、今までとは違うものが来る ！）

「この＜拳聖＞最大の技、『拳聖無限拳』 」

鋭いかけ声と共に
ハンの猛攻が始まった！

「行くぞぉッ！」

（つづく）

< 次回予告 >

ハンを圧倒するアリーナのスピード、力、そして技！

奥義「無限拳」は彼女に通用するのか？

そして、為す術なく敗北するかに見えた<拳聖>ハンが、最後に選んだ道、それは

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第8話 「開かれし神の^{てのひら}掌」

目覚めるは闘いの神、そしてその恐るべき技！
